秋高同窓会だより

題字は第六代塩田会長

発行者
秋田県立
秋田高等学校同窓会
秋田市手形字中台一番地
TEL 0188(32)9553
印刷所
秋田オフセット
印刷株式会社

平成6年度
第2回理事会開催

今年度第二回理事会が、去る十二月八日、弥高会館を会場に、約八十名の理事の参加を得て開催され、各常置委員会からの報告の他、規約改正に関する臨時増刷号の時期についても活発な意見が交わされた。

会は丸山健会長の挨拶のあと、椎名学校長から、今年度の部活動の活躍と、部活動支援に対する謝辞、今後も「文武両道」「自主自律」の教育方針を堅持してゆきたいこと、又来年度から始まる月2回の学校週5日制への対応、などについてふれながら挨拶があった。

続いて、事務局から伊藤事務局長が会務報告と、新しい会則を全会員に周知させる時期などについての話があった。尚、この際、新築された仮称「同窓会館」の名称が正式に「羽城館」に決定したとの報告もされた。

その後、各常置委員会からの報告があり、名簿委員会からは工藤雄一委員長（S33卒）が、会員名簿を一層精度の高いものにするために今後も努力してゆきたいとの話があった。次に財政委員会の速水洋子委員（S39卒）から、先に企画委員と広報委員会の合同委員会で合意された、「新しい会則に関する記事を45号（12月発行）に掲載し、全会員への周知徹底を図る」とする案は、財源不足のため今年度は無理であり、来年度に発行される号に掲載してほしいとの意向が述べられた。広報委員会の田口能祐委員長（S22卒）からは、広報委員会では45号に掲載する予定で準備を進めてきており、早めに全会員に徹底させ、新しい体制で新年度を迎えるべきではないかという主旨の意見と、紙面が型にはまったものにならないよう、紙面の刷新に努めてゆきたいという抱負が述べられた。

その後丸山会長を議長に選出し協議に入ったが、主に、新しい会則を全会員に周知させるための記事をどの号に掲載するか、について協議が行われた。財源は同窓会の基金を取り崩してでも、決まった以上出来るだけ早く「45号に」掲載すべきだといった意見や、全会員から会費を徴収するには時期尚早ではないかといった意見などが出されたが、議長の提案により5分間の休憩を取り、その間にこの問題を収拾するため役員が協議をした。その結果、改めて役員会を開き充分協議をするので一任願いたいとの案が出され、承認された。

尚、その後十二月十六日に開かれた役員会では、会長、副会長、参与、各常置委員会の委員長が協議をし、「同窓会だより」45号に掲載すること、財源は特別会計からの繰入れ等で確保することなどが決定された。

提言
同窓意識の高揚を

顧問　室田　弘（前学校長）

ある本の中に「母校は母港」という一文がありました。それによると「母校は嬉しいにつけ、悲しいにつけ立ち寄る母なる港である。そこは多感な時期を過ごした所であり、みんなと一緒に生きる楽しさを学んだ所である。すべて一期一会のこの世の中で母校だけは私たちを少年の日に連れ戻してくれる不思議な所である……」という意味のことが述べられていました。

私は在職中に、同窓の皆様から同期会の機会に校舎見学をかねた学校訪問を数多く受けました。昭和初期卒業の大先輩から各年次、とりわけ秋中時代から駅前校舎卒業の方々が多かったようです。その折、同窓各位から学校への激励と多くの支援をいただき、非常に心強いことでありました。

また、県外に雄飛された皆様や、県内各地でご活躍中の方々の同窓会に出席する機会がありました。どの会にあっても、懐かしい青春時代をしのび、終わりには決まって「校歌斉唱」で同窓の絆を深め、母校がそれぞれの心のより所になっている感をさらに強めたものでした。

ところで、このような県内外の同窓会をはじめ、総会に出席して気がつくことは、若い年齢層の会員の参加が今ひとつ少ないことであります。確かに、二十代や三十代は繁忙な仕事や生活に力が注がれ、母校を懐かしむ余裕もあまりないと思われます。五十代近くなってようやく卒業三十周年記念の同期会を開催するという状況にあります。

しかしながら、高校野球の甲子園出場などの際には多くの激励と支援をいただいており、母校に寄せる関心と期待は十分に持っていることが分かります。

時あたかも会則の変更という局面を迎えました。各職場、地域社会をはじめ、学校、旧教職員などを通して若年層の「同窓」意識の高揚に努めることが急務であります。特に「同窓会だより」は全会員一人ひとりとのつながりを持つ唯一のものであり、県外在住者にとっては同窓の方々の動静を知る貴重なものとなっております。また、若年層は転勤異動が多く、名簿訂正作業や「だより」の確実な配布のため消息把握が大切であります。この場合、確認のための方法と経費について別途検討を要します。

このほか、年次代表と事務局との定期的な連携を図りながら例えば会費納入の状況や年次の動静などの情報交換に努めることもこれまで以上に必要になると思います。

新しい風・新しい道

会長　丸山　健

同窓会規約が皆様の御協力により改正されましたことは、長い伝統の同窓会にとりまして、まさに画期的であります。

このたびの改正の主なるねらいが、会費制の導入であることは、御存知の通りであります。会員すべての会費納入により、会員意識の高揚とともに、財源の確保が可能になり、同窓会が新しい姿で運営されることとなります。

従来の同窓会は、学校行事への協力や募金などが、活動のほとんどであり、したがいまして同窓会独自の行事は、きわめて希で会員の中にも、新しい同窓会への脱皮を期する意欲的な動きがありました。

会費制の導入により財源基盤が確かなものになれば、同窓会は単なる同窓的回顧や集金活動だけでなく、新しい出会いやふれあいの場の形成にもつながり、その意義は大きなものとなります。

このたびの改正が奏功するかどうかは、定かではありませんが、しかし断行なしに変化も進歩もありえないというのが、改正の理由であります。

采はすでに投げられました。向後さまざまな問題が予想されますが、新たな首途に当たり、是非とも御協力を賜りますよう、衷心より期待申し上げてやまないところであります。今や新しい風を受けて、相共に新しい道を力強く歩もうではありませんか。

同窓会をどう添う会に

企画委員長　大友康二

同窓会。連想ゲームで同窓会と言えば、母校・先輩後輩・総会・寄附集め・存在感の無い組織・何周年祝い等が浮かぶのが常です。なぜそうなのか、理由ははっきりしています。

会員にとって同窓会は、創立記念日か、母校の各種クラブの全国大会出場かでの寄附金を出費しなければならない程度のつきあいだったからです。

しかし、人間の一生を考えてみますと、多数の人々の中から偶然にしても、同じ学校に学んだ出会いとは大きく貴重なものに思えます。もしかすると、私たちは全く他人であったのかも知れませんし、別の校歌を歌って、母校への想いに浸っていたかも知れないのです。

社会の激しい変化は、人と人との出会いを極端に少なくしてきました。車や電話等機械社会は、人の瞳を見て話をする貴重な対話さえも奪ってしまいました。

生活白書が示すように、ほんとうの豊かさの実感が喪なわれた社会が形成されたのです。

こんな時代だから、私たちは周りの人間関係の支柱のひとつとして、職場・地域・仲間に加えて、同窓という柱を打ち建てたいのです。規約改正に伴う会費徴収のねらいもそこにありました。

同窓会は、年齢、職業、地域を越えて、気楽にふれあいのできる社交場になれるのです。

同窓会主催の各種行事が、自主的に運営されたら、どんなにすばらしいことでしょう。それこそ「秋高、ここにあり」と百二十余年の歴史が、いっそう輝きます。そんな夢の実現の第一歩が財政基盤確立の会費制なのです。

今までの同窓会は、入会費、年次会費、役員会費により運営されてきました。それだけに、同窓会意識の欠如は当然でした。年次会費にしても、年次さまざまな形での納入でしたが、その多くは同期会開催の際、会費に上のせをしたのが実情だったと思われます。それを一歩進めて、全員が会費納入により、会員自覚を強めて欲しいのです。

同窓会を変えようじゃありませんか。寄附金集めや、存在感のない組織から、脱皮しようじゃありませんか。全国どこにもない新しい同窓会を構築しましょう。

手形で学ぶ在校生達が、何十年か後に「秋高の同窓会って他校と違う。よかった！」と言えるような長いスタンスでの夢実現にお互い力をあわせたいものです。そのためにも、元気である証に、会費を納入していただきたいのです。

近畿支部へ大震災のお見舞

阪神地区に未曽有の被害をもたらした大震災では、本校同窓会員の被災も懸念され、同窓会では近畿支部に対し五万円のお見舞金を贈った。被災された方々が一日も早く立ち直られますようお祈り致します。

尚、母校の生徒会でも募金活動を行い、寄せられた四十万円近い義援金を日本赤十字社を通して被災地へ贈った。

天上天下

1月17日未明、神戸・淡路島を中心に襲った直下型大地震。震度7、火災も伴って未曽有の大震災となった。亡くなられた方五千四百以上、被災して避難生活を余儀なくされた方三十万。亡くなられた方には慎んで哀悼の意を、けがをされた方・被災された方には、心からお見舞い申し上げたい▼特に、12年前の日本海中部地震の際、大打撃を被り、全国の皆さまから多大なご支援をいただいた本県としては、被災地の一日も早い精神的・物質的な復興を願うものである▼さて、地震・災害の復興ではないが、「秋高同窓会」も大改革の緒についた。これまで、会計は約四百名の役員・理事による年五千円の会費と各年次の会費によって賄ってきたが、会則改正をして全会員一人当たり年二千円の「個人会費」一本にした。「名簿」の整備によって、死亡した方、住所の不明な方を除いて、約二万名の会員に納めていただくなら、同窓会という主体を堅持しながら、現在行っている事業行事の他、これまで功績のあった支部や年次との在り方、学校とタイアップした講演会の開催、卒業○○周年大会も考えられるはず▼また予算に縛られ、「がんじがらめ」になっている「だより」の硬直化も解消できて、今年度うち出した「提言」「随想」のように「年次紹介」「先輩往来」「本棚」「資料館展示」、特集では「羽城」「部活動」などあろう。ためには多彩を極めた20号ごろまでのように、少なくも六面は必要▼いずれにしても英知を結集して、全国四番目の創立高校にふさわしい輝かしい紙面を作ろう。

同窓会だより 全員配付決まる

常置委員会

「同窓会だより44号」発行以後に開催された常置委員会および役員会は次の通りである。

▽企画委員会（十月十四日）

▽広報委員会

小玉副会長以下十八名の委員が出席して、ターミナルホテルで開催された。

まず、合同委員会を開き、規約改正の説明をいつ、どこで、どのようにして行うかが協議された。そこで規約改正文は、二頁の増頁をし、解説文は企画委員会で担当する。これは45号に掲載し、全会員に配付することとした。

そのあと、企画と広報の両委員会に分れて行い、企画では三月の入会式について、広報では45号の編集について話し合った。

▽名簿委員会（十一月十五日）

井上副会長以下十名の委員が出席し、第一会館本館で開催された。

今後のデータベースの管理の進め方と、年次名簿委員との連携のあり方について話し合いをした。

▽年次名簿委員会（十一月二十二日）

工藤雄一委員長以下、九名の常置委員と二十三名の年次委員とが集り、栄太楼旅館で開催された。

会議は、工藤委員長からの常置委員会の報告を行い、このあと、常置委員会に対する年次委員からの要望と、事務局に対する実務的な質疑応答が行われ、今後の年次名簿作成の充実について、意見交換がなされた。

▽財政委員会（十一月二十九日）

まず、事務局から「だより45号」を二頁増頁して、全会員に配付したいとの説明があり、一応了承されたが、46号は従来どおりの配付とすることで、問題があるとされ、これは、理事会か、正副会長で決定してもらうべきであるとした。

次に平成七年度の収支の基本構想について、事務局から説明があったが、「だより」の七年度発行見込みが決定しなければ、収支見込みを出すのは早いのではと、理事会以後に考えることとした。

▽役員会（十二月十六日）

十二月八日の理事会で、正副会長に一任された協議題を審議するため、正・副会長、参与、常置委員長の十四名が、羽城館に集って、懸案の問題を協議した。

まず、「だより45・46号」の発行は、既定予算と特別会計からの繰入れ金等で、全会員へ発送とすることとした。平成七年度分については、基金のとり崩しを考慮しながら年3回の発行と、全会員発送とした。

◆ 会員随想

川と文明

佐藤　菊夫（S22卒）

終戦の昭和二十年九月十八日、突如アメリカ進駐軍の宿舎として、手形の母校が接収され、三ヶ月後の十二月五日の夜、その母校校舎が全焼した。ために、寺内将軍野の帝石鉱山学校などに仮住まいをし翌年五月に秋田駅前にあった兵舎跡に、全校生徒が落着くことになった。もともと兵舎だから、学校として不備であったが、授業再開とあって、ホッとした気持ちで毎日通学した。

私達は終戦当時国鉄土崎工場に動員され、「月月火水木金金」といった無休の毎日を、朝八時から夕方六時まで十時間、勤労奉仕に駆りだされていたわけだから、教室で毎日勉強できることが夢のようだった。

ある日、国語の先生から「川と文明」と題する作文を一時間で書くようにいわれて、突然の指示ゆえブーブー言いながらも、必死でペンを運んだ。後日先生から「多くの生徒は、エジプトのナイルやイラクのチグリス、ユーフラテス川、さらにインドのインダス、ガンジス川について書いていたよ」といわれて、これらの流域に文明が開花した共通の理由を説明された。「毎年決まった時期に氾濫し、上流から肥えた土を運んで広い平野を作り、そのため流域に人々が集まって、農業を起こした。またそこから集落ができ、文明への第一歩を踏みだし、やがてより広い地域に灌漑治水をして、人々は流域全体を統一するような大きな組織にまとめられていく。こうして古代オリエントの特色である大専制国家が起こるのである」と。

しかし、この作文の時間に、たった一人だったが、「雄物川」をテーマに書いた生徒がいた。先生から知らされた時、私はその着眼に驚嘆し、敬意を表したことをいまだに忘れない。私達にとって最も身近で大切な川、日本海との河口に位置する私の生まれ故郷の土崎港の発展に大きく寄与してきた川、それが雄物川だからである。

旧藩時代は物資の輸送路で、雄平仙三郡と秋田平野を後背地に、米、木材などを積み出す要港として、土崎港は栄えた。しかし、明治三十八年奥羽本線開通により、急速に衰退した。その後時代の変遷とともに港も変貌していった。昭和四十年に秋田湾地区新産都市の指定を受けてから、海外船舶の入港も可能になる。秋田湾臨海工業地帯の開発構想を基に、雄物川改修も進められている。現在は国内船の他、マレーシア、インドネシア、ロシア、アメリカ、オーストラリア、ペルー、フィリピンなどの船舶が出入港する。旧藩時代は京都をはじめ関西、その以南の文化が日本海を北上し、秋田へ入った。21世紀は対岸のロシア、中国、韓国との交流を通して、文化秋田の発展を期待したい。

（東京管弦楽団指揮者）

＊　＊

なお、同窓会の企画による「佐藤菊夫展」が昨年七月から九月まで校史資料館で開催され、多くの卒業生が訪れて好評を博した。

センター試験健闘

―「進路学習センター」を拠点に―

私立大の発表に続いて国立大前期A日程の結果を待つところだ。一月のセンター試験は全国五十五万人余が願書提出、本校からは出願四〇〇（昨年四二〇）、三七七名（昨年三九六）が受験した。標準的な国立型受験タイプの五教科六科目八百点満点での平均はセンター発表で昨年より七点アップだったが、本校の同タイプ二八五名の平均点は五八二点でほぼ十二点アップ、低迷する学校も多い中で東北圏内でも上位に食いこんだ。

教科毎にみても世界史、物理、数学Ⅱをはじめとして圏内上位、上首尾に第一関門を通過したといえよう。

全国的には国公立回帰、地元周辺地域への志向が一つの傾向のようだが、東北、弘前、岩手、山形、福島、そして秋大教育鉱山で出願減と、秋田高校には若干違った動きがみえる。前期後期制になって片方の定員が極端に少なかったり、受験型が異なって併願しにくかったりで実質地元一回受験になっていることも一因か。合格進学レベルでは大きく変わらないと読んでいるが、詳しい分析が必要だろう。東北大も二十ほど出願減だが昨年まで以上に二次力の必要性を強調し、対処してきたので、少ない人数で合格者増を、と欲ばりたい。

一方で私立大の増が目につく。生き残りをかけた私大の改革を評価し、私立難関大の洗練された校風にひかれて首都圏私大へ向う面もあるのだろう。倍率は高く浪人勢との競合は一層熾烈なわけで、難関私大受験へもさらなる支援が必要な時期だ。千葉や学芸大、東外大といったところが増えて国立大でも外向きのベクトルが感じられる。再挑戦をめざす諸君の動きにも地殻変動を感じさせるものがあり、東京大への出願は現浪あわせて三十名を越えている。朗報を待つ。

六年度分の進路の事業は締めくくりをつけるばかりだが、そうした活動の拠点となった進路の部屋が大きく様変りしようとしている。

コンピューターを入れた進路室

じゃまな壁をとりはらって、区画そのものが広くなり、光がまわって明るくなった。年度初めからの情報機器整備も着々とすすみ、模試関係のデータベースや大学入試センターともオンラインでつながって、生徒達がゲームセンター感覚で情報をひき出す姿も見られる。いわゆる赤本等も自由に閲覧しながら必要なら室内に設置されたコピー機で複写するという形。五台の機能の高いコンピュータが新たにはいり、データ分析、編集、表示のソフト・ノウハウも今年一年で随分蓄積され、来年度はさらに威力を発揮しそうだ。進路にかかわる生徒達のすべての活動が行える、いわば「進路学習センター」が今、誕生しようとしている。

（進路指導主任　柴田義弘）

慶祝

県スポーツ功労賞

加賀谷　悦　郎（S19卒）（ウェートリフティング）

小柳　宗　雄（S19卒）（水泳）

朝にSHRを実施

秋田高校では長い間、SHRは昼休みに実施してきたが、夏休みが終わった昨年8月23日からこれが朝に移動した。これに伴って1日の日課表も下記のように変更になっている。

◎月～金（水を除く）　『土曜日は3時限まで』

	終始時刻	分
	8:35	
SHR	8:40～8:50	10
1時限	8:55～10:00	65
2時限	10:10～11:15	65
3時限	11:25～12:30	65
昼休み	12:30～13:10	40
4時限	13:10～14:15	65
5時限	14:25～15:30	65

◎水曜日

4時限　13:10～14:00　50（LHR）

5時限　14:10～15:15　65

6時限　15:25～16:15　50（クラブ活動）

大学別志願者数

大学名	人数 平成7	平成6	平成5	大学名	人数 平成7	平成6	平成5	大学名	人数 平成7	平成6	平成5
北海道	34	32	21	東京外語	10	6	7	青山学院	33	14	13
弘前	20	28	35	東京学芸	25	14	19	慶応義塾	18	17	21
岩手	5	17	18	東京工業	6	6	1	上智	9	7	4
東北	77	94	91	お茶の水	5	4	5	中央	41	36	43
秋田 教育	90	126	102	一橋	6	7	4	東京理科	22	13	21
秋田 医	29	29	31	横浜国立	14	17	16	明治	63	39	51
秋田 鉱山	44	56	81	新潟	64	60	61	立教	18	10	12
山形	13	23	20	金沢	9	6	7	早稲田	73	53	63
筑波	20	21	21	名古屋	5	1	1	同志社	5	5	5
千葉	30	16	18	京都	5	9	5	立命館	20	25	19
東京	19	16	17	東京都立	9	7	2				

秋田のやど　栄太楼
同窓会プラン
●円卓皿盤プラン
6000円コース（税・サ込）5品
7000円コース（税・サ込）7品
●お膳プラン
8000円コース（税・サ込）10品
（全てのプランにビール2本・お酒2本付）
小国　輝也（S57卒）
秋田市千秋矢留町6－15
TEL 0188(33)4151

加藤建設株式会社
専務取締役　加藤　俊介（S47卒）
秋田市八橋字下八橋181の11
TEL 0188(62)7947(代)
FAX 0188(62)5667

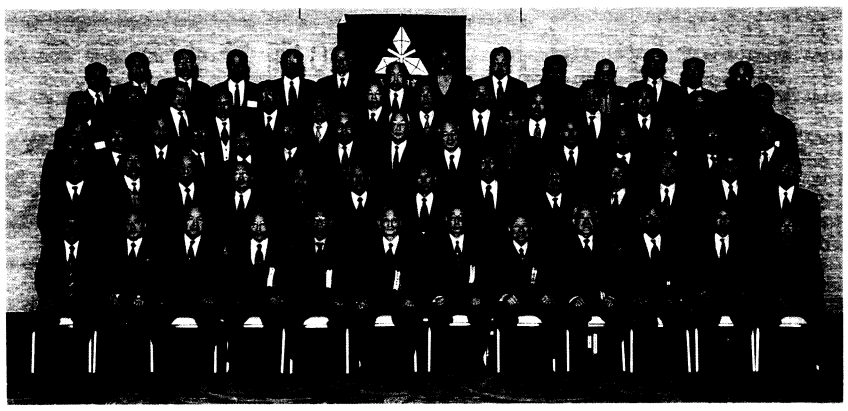
秋田県産株式会社
専務取締役　大島　紳司（S47卒）
本社〒010 秋田市卸町3丁目7－4
TEL 0188(62)6431(代)
FAX・TEL 0188(54)0373

西仙北町商工会
会長　土井　常吉（S18卒）
仙北郡西仙北町字刈和野3312
TEL 0187(75)1319
FAX 0187(75)0423

小野勇本店
小野　又雄（S18卒）
秋田市金足追分海老穴185
TEL 0188(73)2114

内科・外科　秋元医院
院長　秋元　辰二（S17卒）
秋田市土崎港中央4－3－19
TEL 0188(45)1565

昭和二十六年卒同期会



気象庁の長期予想では暖冬そして雪の少ない新年とのことであったが、意に反しその逆を行く気候が繰り返すうち、平成七年一月十四日(土)午後五時から恒例の昭和二十六年卒同期会総会並びに懇親会をアキタニューグランドホテルにて開催した。

二年続きのやや厳しい冬型の天候であったが来賓として、丸山健同窓会長、河先教頭、伊藤事務局長をはじめ、寺田光和、深井博之、櫻谷吾朗の各恩師からご臨席を賜わり同期会に花を添えていただいた。

また関東地区同期会を代表し佐々木研吾幹事長、奈良毅、野尻正庸の各氏が遠路はるばる参加され県内と併せて、総数七十一名の出席者が一同に会した。

小泉会長の開会の挨拶に始まり、我々同期の会員もそれぞれ第二の人生への道を選択し着実に人生を重ねていることからも同期会への参加は貴重な機会と認識し、年々の盛会を期待しようと結ばれ、会議次第に基づき、太田幹事の司会によって総会へと移り、最初に本年の物故者、恩師の田村先生並びに春日井、中野、佐藤(孝)川、佐藤(孝)兄の四名の同期の霊に黙禱を捧げ冥福を祈った。続いて協議事項にはいり、同期会収支決算の承認、同窓会費納入方法の変更等による同期会規約の改正、会費納入方法の改正等を協議し、全会一致で承認された。最後に総会の開催期日を例年の一月を十月に変更することで本年は年二回開催することとなった。

引き続き各報告事項として同窓会理事会等で承認された事項を中心に説明を行ない了承を得たことで会議の日程を終了した。

総会終了後、直ちに会場を移し来賓をまじえて記念写真の撮影を行ない午後六時から懇親会にうつり最初に丸山健同窓会長より最近の同窓会の活動状況、加えて規約改正による同窓会費の納入について協力かたの要請があった。次に河先教頭先生により学校事情を具体的に報告があり、文武両道に学校をあげて精進を重ねて参るとの所信が述べられ、秋高の大いなる発展に期待をもった。引き続いて、寺田光和先生を始めとする恩師の方々からご挨拶を賜わり学生生活の想い出を思い浮かべ感激を新たにした。

乾杯に入り関東地区代表の佐々木研吾君の関東地区の近況報告の後開宴の運びとなり、美酒を飲み交わしながら恩師共々、学び舎での生活で経験した話題を中心に悪天候も意識せず語り合った。

昭和一桁の人生は現代では想像もつかないものがあるが戦中戦後の中で勉学に交遊に言語に絶する感があった中でも、我々の卒業期は生徒会で修学旅行の実施の是非をめぐって激論が行なわれ結局修学旅行は経験することなく卒業したこと、当時は衣食の世界でも忍の一字が美徳でありそれが当然と考える学生時代、最後まで完全な学び舎に恵まれず学生生活を経過したことなど豊富な話題が数限りなく続き時の過ぎることを忘れ愉しい宴のムードはいやがうえにも最高調に達した。

秋田の美酒を飲み交わし、大いに語りあった懇親も終宴となり、本年十月の再会を約し大団円を迎へ、最後に会友の大友兄の発声で母校の校歌をそして田原兄による応援歌を声高らかに斉唱し、会員で万歳三唱し散会した。

（太田　記）

第三回飛翔会開催される

飛翔会とは、秋田二十日会の東北南部から山口県在住の昭和二十年卒の同期会であります。

第3回飛翔会は、去る1月14日目黒駅前〝グランビア〟に33名の同期生の出席を得て、盛大に無事終わることができました。

第三回飛翔会写真名簿

挨拶に続き議事に移った。まず、会務・会計と役員の承認を行い、次に第4回飛翔会の開催（11月下旬東京予定）、と第2回〝健診の集い〟（6月下旬予定）を協議して終わった。

引き続き本番である懇親会に入り、鈴木英二郎君の司会で進められた。

当日はまた、同期の村上透さんの〝日展入選を祝す会〟ともなりましたので、会はいやがうえにも盛りあがりました。

何年ぶり、何十年ぶりに会う友は本当に楽しいものであります。皆名残りを惜しみつつ、11月の再会を約して別れて行きました。

佐藤　周一　伊藤　隆二
岡田　久治　梁田　昭悦
佐藤和三郎　川口　義一
塚本　仲治　大橋英之助
大山　重邦　村上　透
長山　君雄　利部　浩
本間　省　岡崎　和市
佐々木照雄　鷲谷　澄夫
澤田　重昭　鈴木英二郎
半田　丈士　平賀　謙次
加藤　治夫　島田　昌郎
中村　康造　池田　錬二
小高　昭二　渡邊　聰
佐々木清司　月泉　悦良
花岡　寛　貝田　昭次
畠山　和夫
鈴木　秀夫

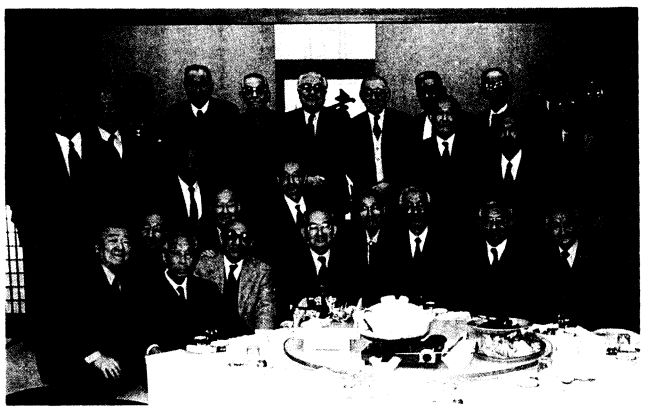
明年、卒業60周年の記念大会を

―秋中五十期会(昭12卒)新年会―

秋中五十期会（昭和12年卒）では、平成7年の新年会を1月21日午後5時から、秋田市中栄太楼旅館大会議室で、会員27名が参会して開催。常任理事の伊藤博次君から、会務報告と昨年中の物故者が報告されて、冥福を祈って黙とう。次いで桜谷理事から、長年の懸案であった同窓会費の納入が、規約改正されて、明年度からいよいよ個人会費納入制度に歴史的転換することになった旨が報告された。

東京支部からはせ参じた細谷行雄君から、活発な東京支部の活動などが報告された後、小沢雄象同窓会副会長、京野大三六郷町長、阿部新前鹿角市長の三君が近況報告と会の発展を祈って乾杯の音頭をとって、本番の懇談会に。日本酒の醸造元、「銀鱗」の那波三郎右衛門、「太平山」の小玉健吉両君から、大量の銘酒が寄贈されたこともあって、宴はいやがうえにも高まった。

酒間の一同の話で、明年は卒業60周年に当たり、かつ会員が喜寿を迎えるという、二重の喜びの年となることから、東京支部会員と合同で、盛大に記念大会を開催することに衆議一決。母校と同窓会の前途を祝福して、校歌斉唱、万歳で打ちどめとした。



〈出席者・返信到着順〉

阿部新、沢石謙、桜谷吾朗、細谷行雄、佐藤忠、京野大三、渡辺喜一、小玉健吉、加賀谷文明、山崎忠秀、佐々木茂雄、近藤達郎、坂本元、鳴海健治、草薙義照、小沢雄象、藤崎吉次、岩間雄次郎、石垣儀雄、佐藤友三郎、小縄太郎、荒川秀晴、工藤俊三、小西庄一郎、福田兼一郎、相沢弘、伊藤博次、（沢石記）（写真は相沢君撮影）

秋中五十一期会開かる

―昭13年卒―

秋中五十一期（昭和十三年卒）同期会は紅葉の始まった十月十五日(土)、秋田ターミナルホテル四階で午前十一時半から二時半までのデータイムで開催された。十五名の出席予定が当日に体調を崩した二名を除き、元気な顔を見せ、記念撮影をすませ、約三十分ぐらい総会を開く。大槻幹事の司会進行で、まず同期物故者への黙禱をささげる。ついで菅原代表幹事から「記録的今夏の猛暑を凌ぎ得たお互いの健康を祝し、母校の春夏連続甲子園出場に対する諸兄の募金協力に謝し、今後の健勝と発展を」との挨拶があった。大槻幹事から資料による会務会計報告があり、若干の質疑応答後に懇親会にはいる。

東京紫紺会の辻裕氏から杜甫の詩を引用した望郷の念切なるメッセージがコピーで紹介され、欠席者の近況綴りも回覧される中、石田幹事の音頭で乾杯、気分は一気に盛り上がり、東根小屋校舎の授業風景や武勇伝、対外試合の思い出などに花が咲き、時のたつのを忘れるくらいであった。頃合をみて、赤間氏の発声で高らかに校歌、校友会歌を斉唱し、来年の再会を約して解散した。

出席者は、赤間正一、石田秀一、伊藤繁雄、江見喜代彦、大槻家静、柴田均一、進藤一雄、菅原繁雄、鈴木哲郎、高安泰助、畑沢恵、平野庫治、横江剛一（菅原記）

日本石油㈱特約店
大民石油販売株式会社
常務取締役
大島　峰夫
（S48卒）
秋田市土崎港西3丁目7－29
TEL 0188(45)0181

有限会社
白澤不動産鑑定士事務所
代表取締役不動産鑑定士
白澤　啓
（S48卒）
秋田市八橋二和町12－23
TEL 0188(62)8095

秋高27年卒　十日会々員

伊藤　隆　兼松　久稔　辻　悌五郎　西田　繁
藤原　豪男　堀井　一雄　三浦　祥助　山内　静

秋高27会報第2号
発行　5月、
原稿締め切り3月末
編集人　信太　聡一
（☎23－6688）

秋高27年卒同期会

平成7年度総会
6月16日(金)PM6時　平安閣
昼食会
毎月第4月曜　正午　平安閣
代表幹事　辻　悌五郎（☎45－1265）
事務局長　藤原　豪男（☎34－3771）

第40回青少年続書感想文コンクール
三戸　絵里子さん（1年）が
優良賞

第四十回青少年読書感想文全国コンクール（毎日新聞社、全国学校図書館協議会主催）で、本校一年の三戸絵里子さんが「午後の曳航」で優良賞を受賞した。三島由紀夫の「午後の曳航」を読んでの感想文で、夏休みの課題で書いたものを学校で応募した。全国からの応募は過去最多の三百八十九万四千三百五十一編、内各都道府県の地方審査を通過した五百八十七編から最終の中央審査で六十四編が選ばれた。感想文は、毎日新聞二月一日朝刊に掲載された。以下、三戸さんに読書について述べてもらう。

三戸絵里子さん

読書は幼少の頃から好きな方であったと思います。なぜ好きかといえばやはり「楽しいから」ということにつきるのですが、全ての本が楽しいわけでは勿論ありません。中には幾度読んでも一向に理解のできない本もあります。思うに、読書を楽しむためには読者の側からの意気込みだけでは不充分なのです。大切なのは本の側からも訴えかけてくる本を選ぶことだと思うのです。読書においても、「気が合う」ということが一番なのではないでしょうか。フィーリングのずれたままいくら読み進んでも、何ら実りのあるものは得られないだろうと思います。読書はつまらない本を読まないから楽しいのだと思うのです。手探りで本を選び、その中で感性に共鳴し、本能を揺さぶるような本に出会うことができたら、それを気のすむまで読み耽る。それが正しい読書なのかはわかりませんが、とにかくこれが楽しい読書だと感じられるのです。

三戸さんの好きな小説を紹介します。

「郷愁」　ヘルマン・ヘッセ
「孔雀」　三島由紀夫
「夢十夜」　夏目漱石
「春の嵐」　宮本輝

吹奏楽部が第十七回アンサンブルコンテスト秋田県大会で
金賞

一月二十一日、秋田市アトリオンで行われた第十七回アンサンブルコンテスト秋田県大会（秋田県吹奏楽連盟、朝日新聞社主催）で、本校の吹奏楽部が金賞を獲得した。

曲目
「ロンドンの小景」より
G・ラングフォード
演奏者（金管八重奏）
◎飯嶋宏紀　◎石岡裕輝
◎斉藤学　◎本間なつ恵
◎小川茂樹　◎菅原芳行
◎幸野伸寛　◎工藤達範

「アンサンブルコンテスト県大会」の報告
吹奏楽部顧問　小林清人

今年の県大会は、一月二十一日(土)にアトリオン音楽ホールで行われた。この大会に出場するためには、冬休みに寒さの中練習をし、校内コンテストで優勝しなくてはならない。昨年までは、クラリネットのグループが3年連続して校内代表になっていたが、今年は小差で金管八重奏が代表となった。このように本校では、最初から顧問が優秀なメンバーをピックアップしたり、曲を一方的に決めたりせず、あくまでも校内活動を中心に生徒達の自主的な練習を重視しながら行ってきている。

大会当日は、真冬にしては暖かな日和で、全県から28校のグループの参加があった。本校は22番目に出場したが、メンバー一人ひとりが力を合わせ、心を一つにして大変見事な演奏を行った。音に輝きがあり、響きも豊かですばらしいものであった。久しぶりの東北大会出場だけに大いに頑張ってもらいたい。

今回の大会出場が、今後の部活動を進めてゆく上での大きな力となり、全体のレベルアップに繋がればと思っている。

練習風景

今年の演劇部から

演劇部顧問
小野　健爾

「茹で卵が好きかい。かぶりつくときのあのプツッとした歯ざわり。白身がさらっと…」冒頭から笑い声がはじける。景が進むにつれて笑声が消え、はてな？と言った雰囲気が広がる。幕切れはそのまま客席のどよめきとなった。

九十四年十一月十二日～十三日、大館市民文化会館での高校演劇全県大会。秋田高校は「オムニバス DOOR'S」と題した部員の手になる創作劇で参加していた。「日常生活の中に潜む漠とした不安」「状況からの出口を見つけようとしての喘ぎ」を6景からなるオムニバスで構成。全体としてはいわゆる〝芝居の常識〟からはかなり離れてもいた。

高校演劇の舞台はその時の部の、部員の状態を容赦なく映す。それが巧拙を越えて人の心を打つこともある。今回の舞台もその例外ではなかった。

今年、日常の部活動は必ずしも順調ではなかった。まとまりも、意気込みも、したがって稽古もかなり不十分でもあった。それでも創作、地区大会最優秀賞を成し遂げた。多分に部員個々の才能におんぶしていたのだ。これは演劇部活動にあってはあまり好ましい形ではない。その才能を努力の糸で綴り合わせて、より豊かで深みのある世界を創るのでなければ、演劇活動本来の生産力は生きてこないのだ。

この点、悔いは残る。その悔いが来年度の課題になる。演劇活動は人間本来の成長と深く結びついているものだけに、部の在り方を大事にしたい。

ここ四年間の演劇部の活躍

平成三年度
作品　イスメネ（佐藤信作）
中央地区大会　出場

平成四年度
作品　アガメムノンとエレクトラ（ジューベ作）
中央地区大会　最優秀賞
全県大会　優秀賞

平成五年度
作品　はと（勝山俊介作）
中央地区大会　出場

平成六年度
作品　DOORS（演劇部作）
中央地区大会　最優秀賞
全県大会　優秀賞

各部の活動

〈放送〉
全国放送コンクール
（十二月二十七日・東京）
奨励賞　ラジオCM部門
「ハタオくんとハタコさん」

〈柔道〉
●第二十六回全日本ジュニア柔道体重別選手権大会
（十一月二十日・大宮市）
一回戦
奥村俊樹○有効　松下（早稲田大）
二回戦
奥村　○技有　佐藤（国際武道大）
準々決勝
奥村　効果○山元（天理大）
●全県新人
（十二月二日～三日）
男子団体　準優勝

〈バレーボール〉
中央地区新人
（十二月三日～五日）
準優勝

〈スキー〉
中央地区新人
（一月十一日）
男子総合　二位
女子総合　優勝

哀悼

目黒慥一郎（T12）大曲市6・11
大塚　吉内（S6）平鹿町6・11
佐川　充雄（S26）秋田市6・12
池田　直治（旧職員）秋田市6・12
佐藤　孝（S26）相模原市6・12
越後谷　至（S14）秋田市7・1
品田　豊（S36）秋田市7・1
米澤　忠晴（旧職員）秋田市7・1
浅利　知（S42）秋田市7・1
今村久吉郎（T10）五城目町7・1
須藤　鐵雄（S18）秋田市7・1
鈴木　喬（S9）秋田市7・1
大森　峰彦（S31）秋田市7・2
平川　栄三（S5）東京都7・2
加藤　貞次（T12）東京都7・2
佐々木英一郎（S21）秋田市7・2
小松　正雄（S14）秋田市7・2

会務報告

▼だより45号で報告後の会務は次の通りであります。

12・8　第2回理事会
16　正・副委員長会議
20　同窓会だより45号発行
1・13　市役所羽城会
14　26年次同期会
14　36年次同期会
2・3　広報委員会
4　西仙北支部総会
16　大館支部総会

事務局だより

昨年七月の総会で承認された規約改正は、画期的なものであります。

この改正された「会則」を如何にして、全会員に周知を計るか。これには財源確保と共に、事務量の問題でも頭の痛いことであった。それに「会則改正の説明手引」を「同窓会だより45号」に付けることが、12月中旬に入って決定しましたので、発送の遅れたことをお詫びします。

なお、「同窓会だより」は今後、全会員に個人毎に発送することになりましたので、住所等の変更がありましたなら、本部事務局までお知らせ下さい。

住所変更届けのない場合、「同窓会だより」が届かないこともありますのでご注意下さい。

BAR・バイロン
Byron
田原　重昭（S38卒）
秋田横町ホワイトビル
TEL 0188(62)7880

伊藤治兵衛（S38卒）
大館市字部垂川町24番地4
TEL 0186(49)2268
FAX 0186(49)2167

Art Beauty Komaba　美容と婚礼
アートビューティー コマバ
駒場　幸一（S37卒）
秋田市千秋明徳町2-74（本内向い）
TEL 0188(33)0066

昭和37年卒同期生諸君へ
3年ごとの総会を次のとおり開催します。万難を排し出席されたし。
青春時代にかえって、飲み明そう。
（詳細は別途通知します。）
日時　平成7年8月12日(土)午後6時～
会場　料亭 濱乃家（秋田市川反4丁目）
会費　10,000円
昭和37年卒同期会
会長　大嶋　駿一

医療法人 敬徳会
藤原記念病院
藤原　慶之（S28卒）
南秋田郡天王町天王字上江川47
TEL 0188(78)3131

しっかり働き、ゆっくり休もう!!
秋田綜合労務管理事務所
猿田　忠（S28卒）
秋田市山王2丁目2-34
TEL 0188(62)4321

株式会社 本山ランドシステム
0188-63-8080
不動産コンサルタント　本山恒昭
昭和38年卒・ボート部

小林法律事務所
弁護士　小林　昶（S38卒）
秋田市山王3丁目8-34
山王ツインビル2F
TEL 0188(62)5000
FAX 0188(62)5906

株式会社 すみとも建設
代表取締役
佐藤　章（S37卒）
秋田市広面字家の下36番地
TEL 0188(35)3455(代)
FAX 0188(35)3468

不動産のサービスセンター
土地・ビル・アパートの仲介・管理
合資会社 金子ビル開発
金子　健三（S37卒）
秋田市大町1丁目2-26
TEL 0188(65)0281(代)
FAX 0188(23)5655

創業大正十二年
花器・新古茶道具専門
有限会社 日の丸屋
代表取締役　渡部（宗達）達郎（S28卒）
秋田市大町4丁目3-7
TEL 0188(62)3448
FAX 0188(24)4281

総合建設業
㈱本郷建設工務所
専務取締役
本郷　滋（S28卒）
秋田市千秋矢留町7-29
TEL 0188(32)4681